

P15 外傷を初診時主訴とする患者の実態調査

Clinico-statistical investigation of injury patients

○緒方 麻記 落合 聰

Maki Ogata Satoru Ochiai

(医) 雪ノ聖母会聖マリア病院小児歯科

Department of Pediatric Dentistry St.Mary's Hospital

【緒言】

当院は救急医療提供を役割の 1 つとしており、当科に関連するものとして外傷が挙げられる。今回、各年齢における受傷状況を明確にするために口腔外傷の状況について調査したので報告する。

【対象と方法】

平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月の 1 年間に外傷を主訴に当科を受診した 73 名を対象に診療録とともに、年齢、受傷部位、原因等について調査した。

【結果】

年齢は 0 歳から 32 歳と広範囲に分布していたが、1 歳が 23 名と最も多く、次いで 0 歳および 2 歳が各 12 名であった。受傷部位は、歯牙が最も多かったが、低年齢では上唇小帯や口腔軟組織の受傷が多くみられた。原因是、最も人数の多い 1 歳では走っていての転倒が多く、次いで 0 歳ではつかまり立ちでの転倒、2 歳では風呂場や階段での転落が多かった。

【考察】

受傷年齢は広範囲に分布していたが、2 歳までの低年齢児が半数以上を占めていた。低年齢児では口腔領域受傷の頻度は高い¹⁾といわれており今回の調査においてもその傾向がみられた。特に各年齢の行動（0 歳：つかまり立ち、1 歳：歩き走り始める等）と関連した受傷が多く、日常生活において常に受傷の可能性はあると考えられる。今後、受傷状況をより明確にすることで、保護者に対し各年齢において配慮する点を指導できればと考えている。

【文献】

1) 小児の歯の外傷の実態調査、小児歯誌 34(1) : 1-20, 1996